

報告書刊行にあたっての序言

平和のための文化イニシャティブについて

ゲーテ・インスティトゥートと国際交流基金（ジャパンファウンデーション）は、数年前から密接に連携を行って参りました。姉妹関係にあるこの2つの組織は、国際的な文化間の対話と交流を促進することで、それぞれの国の対外文化政策に重要な役割を果たしています。ゲーテ・インスティトゥートも国際交流基金も、自分たちの目標と活動を、政治家にとどまらず、自国の市民に広く知っていただき、応援の声を得たいと考えています。

そこで私たちは、国際交流基金から東京でシンポジウムを開かないかというお申し出があったとき、それを有り難く受けさせていただいたのです。テーマは、平和維持における文化の役割——これはゲーテ・インスティトゥートの基本方針でも重要な地位を占めるものです。「平和のための文化イニシャティブの役割」が、日独両国から報道、学界、文化交流の実践の現場から経験・知識の深い人々を集めて2009年5月に開かれたこのシンポジウムのタイトルです。シンポジウムの目的は、危機や紛争にさらされた地域で文化的な対話を涵養するために両国がとっている戦略や手法を学ぶことでした。

アフガニスタン、パレスチナ、インドネシアその他の世界各地から、事例が報告されました。これらは、内戦中や内戦後、自然災害や政治危機・紛争下で文化イニシャティブがどのように有益な役割を果たし得るのか、多くの示唆を与えてくれる事例となっています。文化は暴力的な状況において無限の可能性を持っているとは決して言えませんが、だからといってその力を過小評価すべきではありません。狭義の芸術といった意味にとどまらず、たとえばスポーツ、大衆芸能、工芸などを含めたより広い意味での「文化」は、紛争後に残るトラウマを克服し、平和と安全の下での共存という考え方を促進すると言えましょう。

我々の基本的な目標は類似しているように思いましたが、一方で、方法論における違いが明らかになりました。文化イニシャティブを通じて平和を育む方法に日本風とドイツ風があるらしいという知見が得られたと言えます。日本側の事例は、より地道なものであり、伝統芸術や大衆芸能といった形の上に行われたものでした。これは、社会的相互作用の重要性を強調したものです。一方のドイツ側の事例は、もっと現代的な芸術の形を指向したものであり、これが社会変革の原動力となることが示されました。シンポジウムは互いのスタイルから学ぶがあると教えてくれる機会でもあったわけです。そしてここから、国際交流基金とゲーテ・インスティトゥートが危機・紛争下の地域にそれぞれのノウハウを持ち寄ってそれぞれの活動を融合する試みを行うべきではないか、そういう時宜があるのではないか、という提案もなされました。この提案が賛意を得たことから、やがて新たな一連の話し合いがもたれることになるでしょう。それが文化イニシャティブを通じて平和を育むという目標をもった共同プロジェクトへの道を開いてくれることを願ってやみません。

2009年12月

ハンス＝ゲオルグ・クノッ普

ゲーテ・インスティトゥート事務総長